

久留米の藍胎漆器

久留米大学留学生別科

A クラス 214BD06

周環轅

1. はじめに

その土地にはその土地特有のお土産がある。普通は食品と工芸品、この二つの種類がある。それらによって、その町の魅力や歴史など様々なことを知ることができる。そのため、私は小さい頃から、ずっと古い工芸品について非常に興味を持っている。そして、久留米に来て、久留米には藍胎漆器という有名な漆器があることを知った。なぜ、藍胎漆器このように有名なのか、非常に興味深い。だから、藍胎漆器の背景について、インターネットで調査したい。

また、久留米の漆器はどのような歴史と文化があるのかを調べるために、久留米の伝統工芸品藍胎漆器について、インタビューを行うことをした、そして、色々面白いことを発見した。

2. 背景

井上藍胎漆器のホームページによると、以下のことが分かる。藍胎漆器の由来は久留米の塗師の川崎峰次郎、竹細工師の近藤幸七、美術愛好家の豊福勝治により明治初期に始まり、この久留米独特の塗りに対して藍胎という言葉が作られた。明治の頃、井上熊吉は昭和天皇のご即位式に使われた屏風を製作させた。現在この伝統的な技術保持者も、今では数えるほどしかいなくなった。

そして、藍胎漆器の藍は竹籠を意味し、藍胎漆器とは竹籠を胎んだ漆器という意味である。素材の竹は、地元の真竹（まだけという種類の竹）を材料にする。塗りは、油性漆、ポリウレタン、天然漆等を使用する。塗りの材料により、作ることが出来ない色、出来る色がある。

3. インタビュー

2016年1月11日に九州藍胎漆器でインタビューを実施した。インタビューに答えてくれたのは九州藍胎漆器の従業員の方である。

1) 外国で販売する予定がありますか。

答え：ないです。商品の海外への輸送費と関税がかかるので大変だからです。

2) 昔は手作りだったと思いますが、今でも手作りをされていますか

答え：もちろん、高価な芸術品は全部手作りの物です。

3) どのような補助がありますか。

答え：ないです。

質問のあと、実は店員さんは藍胎漆器の店は三年前に閉店していると言った。私は非常に驚いた。どうして、このようにきれいな芸術品の生産を停止したのだろうか。その原因について以下の話を聞かせてもらった。

実は以前、九州藍胎漆器の制作工場を中国に建てました。大部分の労働力も中国人です。しかし、中国の経済は急速に発展したので、中国人の教育の水準も高くなって、皆さんは大学に進学した後、手で作る仕事より、事務員や教師などの職種を選ぶようになりました。だから、藍胎漆器の中国の工場は労働力不足になりました。

なお、会社にとって一番大きい利益は高価な飾りです。ですから、日本国内で購入する方は少ないです。漆器はとてもきれいで精巧な物なのでもちろん高価です。しかし、普通の日本で子供を育てている家族はそのような高価な飾りを買うことは少ないです。

そして、海外市場もありませんでした。藍胎漆器はすべて手作業なので、コストが高くなり、しかも、輸入品として海外で売る時は、関税に加えて、輸送費がかかります。

以上の話を聞いた後、私はとても残念だと思った。このように魅力がある工芸品が急速になくなっていく。数百年後の人は漆器というものは何か、藍胎漆器とはどのようなものか、全然分からないことは、本当に悲しいことだと思う。

また、九州藍胎漆器でインタビューを実施した後、2016年1月13日に井上藍胎漆器に行き、九州藍胎漆器で実施した同様の質問と営業を続けるためにはどんな努力が必要かを聞いた。実は井上藍胎漆器は営業中だが、赤字だ。全然、生活できない状況だ。

話を聞いた後、私は家に帰って、全部の資料を整理して、伝統的な文化を守るために、私は九州藍胎漆器と井上藍胎漆器で実施したインタビューの答えをまとめて、以下に四つの提案をする。

- 1) 現状から見ると、海外市場より、国内の市場を開拓することが一番大切なのではないだろうか。
- 2) 学校、団体など、若者の間に伝統品の魅力を伝えて、藍胎漆器の工場で見学イベントを行う。このように精巧で優雅な伝統品はどのように完成するのかを見てもらう。このようにしたら、伝統的な工芸品を守る意識を育てられるかもしれないと思う。
- 3) 普通の生活に合わせて、会社の主力は日常的に使える品に変えたほうがいいと思う。年齢によって、消費者の需要も違う。それぞれの年齢層に応じた商品を作ることが大切だと思う。食器、茶道具など日用品を販売して、そして、子供のおもちゃや女性の髪飾などを開発して、ターゲットの幅を広げるのはどうだろうか。

4) 国や地方から、補助をもらえたら、少しでもこの現状を解決できると思う。実は、箸や皿など、漆器の価格も高くなくて、人々が一人一つ買うなら、現状を改善できるのではないだろうか。

4. まとめ

ある町の工芸品を見ると、その物の背景や歴史が現れてくる。それはその町にとって無形の財産だと思う。昔の職人から受け継いだ、伝統工芸を守って発展させる責任は若い世代にもあると思う。今回のレポートを作成したことで、私は久留米の町について深く理解できたように思う。それは最も意味があることではないだろうか。できれば、伝統文化を守る心を一人でも多くの人に持ってほしいと願っている。このことが私にとって、レポートを書いた意義である。

参考文献

井上籃胎漆器 <http://www.inouerantai.jp/> (2016年1月13日参照)



写真1 インタビューの時
2016年1月13日に撮影（撮影の許可あり）



写真2 竹と皿